

(第2号より続く)

## イントロダクション

FRANCISCO VARO の ARTE DE LA LENGUA MANDARINA (広東、1703)  
その伝記的、歴史的、文法的状況

SANDRA BREITENBACH (カルガリー大学)

### 1 はじめに

初期中国語の記述、すなわちヨーロッパ人によって編纂された中国語文法研究の歴史は、未だ広範囲に渡る調査の対象ではなかった。ドミニコ会宣教師による文法と関わりのある2, 3の作品は、言語学的状況における分析よりも、記述的、歴史的な側面が強調されてきた。このイントロダクションでは、在華宣教師によって書かれた初期中国語記述の特徴と骨組みを新たに見つめ直し、ヨーロッパ人が当時遭遇した「調査対象言語」の言語学的特徴を説明するのに適用した方法を明らかにしたい。

大要としてまず文法観の歴史及び発展と関連する所のドミニコ会言語記述について述べ、つぎに彼らの貢献は今日の言語学にとっても関連するかどうかという問題について討論したい。このような文法研究の起源を分析する事により、現在の読者は言語観の歴史と発展、及び彼らが現代の言語学用語と言語学的信念に与えた影響についての洞察を得る事ができる。そこで『在華宣教師の文法』とは正確には何を意味するのか」というよくある問いについて考えてみたい。

この研究の対象として、私はドミニコ会宣教師 Francisco Varo が1682年に製作した中国語の文法書とその伝記的、言語学的状況を取り上げたい。近代の言語思想とそれが後の言語観に与えた影響を調査する場合、前もって方法論に関する討議がなされる必要がある。まず第一にそのテキストが先の言語思想の影響を受けているかどうかという考察、次にその影響がどのような形で現れているかの決定、最後に影響を及ぼした初期の出典に対する適切な評価がもとめられる。

17世紀及び18世紀の言語学説を述べる場合、全ての状況に於いて創作された考えならば、後の作品が前の意見の影響をうけているように見えるときにも、「影響」という言葉の使用に注意しなければならない。さらに歴史的文献を「現代のレンズ」を通して見ることは避けなければならない。Brekle1987, Koerner1976,1987, Schmitter1987といった論文では、現代の読者に近代の概念を批判的に提示しており、そこでは言語学史編纂の発展のための方法が討議されている。幾つかの議論をここに引用しよう。Brekle と Koerner の両者は言語史への

解釈学的な研究方法について議論している。Koerner1976は歴史的テキストを分析する第一の方法は、著者の生きていた時代に広く行われていた「世論」を形成する知的且つ政治的風潮を考慮に入れる事だとする(参照 Becker1932特に p.5)。次に個々の伝記的要素、認識状況、関連する科学的学問の「業績」に対する知識、これら全てを言語史編纂という立場から考慮しなければならないとする(Koerner1987)。最後に、「影響」とは歴史的著書の著者自身によってはっきりと認められたもの、及び著者が手元に持っていた別のテキストに類似点が見られると論証された直接的影響の全てである(Koerner1987)。Koernerは「影響」という語彙を用いるとき1つ注意しなければならない事があると考え。すなわち「それ自体」カテゴリーとして用いられるべきでもなく、また現在の学説を証拠立てるために整理されるべきでもない(Koerner1976)。2つ目に必要な要素は、現代のいかなる術語をも考慮せずにテキスト「内部」を解釈する事である。現代の概念と術語が適用されるのは最終的な手段、すなわち古代のテキストを現代の読者に分かり易くするためだけである(Koerner1987)。このような討議は、初期の作品が次の作品に与えた「影響」をいかにして証明するかという論点や歴史的文献的確な位置づけを分析するのに重要である。彼らは当時の歴史的、言語学的状況に直面した特定の著者の記述に敬意を払っていたようであり、意識的かどうかは別として、流布していた思想傾向の影響下にあった。中国語文法の発展の歴史、特にドミニコ会文法の歴史における伝記的、歴史的、言語学的状況についての問いかけは、その枠組みが初期の中国語記述の特徴を決定した以上、確かに重要であると証明されるだろう。

ラテン語と比較して中国語を記述する方法は、言語学者の間で長らく論点となっていた。当然、ギリシャ・ラテン語をモデルとして盲目的に模倣する事は、中国語研究への先入観のない研究方法を妨げる事が推測される。しかし次々とある程度任意に、より初期の傾向を模倣する事は革新と創造性を完全に妨げる、といった主張のような絶対的な陳述には用心しなければならない。現代の心理学ではいかにして創造の過程がなされるかについての教訓的な研究方法を提供する。Csikszentmihalyi 1996の定義によれば、創造性とは主に前の科学的発展から進化し作られたものである。新しい考えや視点は、たとえ個人によって自発的に表現されたかのように見えたとしても、大きな共同体によって形成されたすでに存在する価値によって受け入れられ判断されなければならない。さもなければ提案された革新的価値を評価するのは実際不可能であろう。この視野を論証に組み入れ初期宣教師研究に移せば、意見が形成された過程と、彼らが次々に共同体全般に受け入れられ世論にさらされた過程には、相互関係がある事がわかる。この方法により、初期宣教師が検討を始める最初の基礎としてラテン語を選択したことに対する新しい見解が得られるであろう。

これら予備的な考察を念頭に、最初の印刷された中国語文法書の分析をここに紹介する。Varoの文法が重要なのは中国語文法研究の発展に中枢的役割を果たしたためである。彼の型は他の宣教師による後の語学作品によって追隨されただけでなく、さらに中国語学史全体の発展を決定したと思われる。ここで説明されるべき重要な側面の一つは、Varoの教えが

宣教師や、中国の学者及び後に中国語文法書を編纂したヨーロッパの学者それぞれによる次世代の言語学論文へ与えた影響である。Varo の作品はドミニコ会、イエズス会宣教師ばかりかヨーロッパや中国の学者にも強い影響を与えた。中国語学史の状況と関連して論証するために、その影響の特質をここで簡単に論じたい。さらに初期言語記述の評価という問題を扱う事は、歴史的、言語学的状況だけでなく、彼らの貢献の目的が方法論として正当だったかという問いでもある。最初の中国語文法を調査するとき、本来宣教師は科学的な興味から外国語の文法を書くことに駆り立てられたのではなく、むしろより効果的に福音を説くためにできるだけ早くそれぞれの言語を学ぶという目的があった事を念頭に置かなければならない。最後に現代言語学と中国学から見た古代言語記述の位置付けについて述べたい。単に聖職者の教えを助ける道具として現代の読者の関心を引くのではなく、これらの歴史的文献には音韻論、語形論、統語論、意味論のデータが残されている。この言語資料はもし教科書や文法書の形で文章化されていなければ全く知られることがなかったであろう貴重な言語情報を、現代読者の研究のために提供する点において重要性をもつ。

最後に、中国伝統語学とヨーロッパ人によって書かれた中国語文法書とを関連させて考えるべきである。Varo 自身の考えと後のドミニコ会言語思想は、主に辞書編集法に重きが置かれ分析的記述文法へは帰着しなかった中国語学の伝統とは明らかに全く異なる方法で発展している。しかし我々の最初の論題が中国における西洋の学問の影響である以上、この論題はここでは扱わない。

## 2 Francisco Varo の Arte de la lengua Mandarina (広東、1703)

この章では Varo の Arte de la lengua Mandarina (以下『アルテ』) と中国及び日本の文法思想の発展に於ける位置について扱う。まず Varo のテキストの簡単な概要から始めたい。1682年2月18日、Varo は中国での30年以上に渡る言語学習の後、福建省で中国語文法を完成させた。滞在中、彼はマンダリンとして知られる標準語と、省都福州付近で話されていた方言、そして福安地方の方言の完全な知識を獲得していた。

題名に用いられる「官話 (マンダリン)」という言葉はとりわけ興味深い。Varo が記述した言語を正確に決定し、その言語と現代ではしばしば多義性のある「官話 (マンダリン)」という言葉で示される会話形態とを注意深く区別する事が重要である。この言葉は、今日では北京周辺で話される北方方言を意味するが、Varo の用法はいかなる特定の北方方言にも当てはまらない (Coblin)。Varo やその他の人物の著書に残された熟語は、その時代中国で広く分布しており、共通語として中国の官僚や商人そして外国人宣教師に便宜を与えていた官僚の言葉 (官話) を基礎としていたと思われる。Varo の文法に用いられる言語は北京周辺で話される方言やいかなる時代の「北京官話」とも一致せず、実際には少なくとも16世紀から18世紀にかけて中国で普及していた南京語を基礎とした共通語である (Lu1985, Yang1989, Coblin 近刊)。このイントロダクションでは「官話」は以上の意味とする。

次に、『アルテ』の分類と接点に焦点を合わせたい。Varo の生存中この本は稿本として広

く流布し、彼の同僚によって言語習得の良きハンドブックとして高く評価されていた (Varo1703,序文,p.1;Rosso1948)。17世紀後半には少なくとも、1682年に Varo によって完成されたスペイン語版と彼が2年後に書いたラテン語版の2つの原版の稿本が存在していたと思われる。この両者はそれぞれの作者が誰であるかについての価値ある情報を提供し、また当時のヨーロッパ人の中国語に対する見方を変更させる可能性がある点で特に興味深い。ラテン語版は1835年に *Grammatica Linguae Sinensis* という表題をつけてナポリで出版された版のもととなった証拠がある。2冊の書の関係に対する最終的な判断は1835年に印刷された版が閲覧できるようになったときのみ下すことができる。Varo のスペイン語稿本は著者の死後1703年に広東 (Cordier1901) で、フランシスコ会宣教師 Pedro de la Piñuela(1650-1704)によって出版され、序文と Basilo de Gemona(1648-1704)による告解の手引きが加えられた。1703年4月25日の De la Piñuela の手紙に述べられているように、版木の準備には Placyd Wallczak(また Placidus de Valcio として知られる)が監督にあたり、伝統的な中国の木版印刷が方法として用いられた。この1703年版は99ページあり16章に分かれている。中国の漢字は避けられ、例は代わりに音訳が与えられている。1703年に印刷されたオリジナルは少なくとも13部確認されており (Gonzalez1966)、それ以上存在した可能性がある。Rosso1948によれば、第二版は1790年に原版から作られた。この第二版には告解の手引きは含まれない。代わりに編集者は新たに9葉を編纂し印刷した。この貴重な版のコピーはニューヨーク市アメリカン・ライブラリーのヒスパニック・ソサイエティ部門に所蔵されている。いつ誰によってこの版が作られたかは知られていない。アメリカ国会図書館にはさらに別の『アルテ』の稿本があるが、この版にはプロローグと告解の手引きが含まれていない。この稿本の目次は幾つかの点で1703年版と異なる。そこには2つの題名がある。題名ページの文は Rosso1948にファクシミリによる複写があり、そのページの左には1793年にリプリントされたというデータがあるもう一つの題名ページがある。アメリカ国会図書館の稿本はヒスパニック・ソサイエティズ・ライブラリのおそらくは1790年ではなく1793年の日付がある版本と密接な関わりがあるようだ。2冊の関係には2つの可能性がある。アメリカ国会図書館の稿本はヒスパニック・ライブラリ本の書き写しであるか、もしくはヒスパニック・ライブラリ本が基づいたオリジナル稿本である。編集者が1703年の原版の版木を手元に持っていたと思われるのでない限り、最初の仮説がよりもっともらしい。さらに、彼が完全な1703年版を単に2, 3カ所変更するためにもう一度コピーしたとは考えられない。

中国語の本の題名は東洋と西洋の学問の関係を考えるとき興味深い。つまりその言語表現がギリシャ・ラテン語と関係をもつ事により、言語の特徴づけに於ける文化的傾向を決定するときである。『アルテ』の名称にある *arte* とは文法的技術を指し、文法的技術を表す *ars*、科学を表す *scientia*、で名高い伝統的言語学を参考にしている。以下、それについて論じる。

『アルテ』の解釈のために、幾つかの稿本と印刷されたテキストが検討された。1481年にスペインの人道主義者 Elio Antonio de Nebrija(1444-1522)による初期ラテン語文法書の初版は

Varo の『アルテ』の典拠を調べるのに特に重要である。同じラテン語学校文法書で他に影響力のあったものに Manuel Alvarez(1526-1583)による天草版の *De Institutione Grammatica* がある。この本は1594年に印刷され、日本の宣教団に最も影響を与えた。

ドミニコ会とイエズス会本の概念の枠組みを築いたラテン語勢力の次には、ドミニコ会修道士 Francisco Diaz(1606-1646以下)と Juan Bautista de Morales(1597-1664以下)の稿本が、これまで書かれた最初の中国語文法書として述べる価値がある。これらの稿本の影響力は、実際のコピーが現れない限り推測する事しかできない。この初期中国語文法に続いて、イエズス会修道士 Joao Rodriguez(1561-1634)による初期日本語文法書 *Arte Grande* (長崎, 1604-1608)と、より簡明な1620年の *Arte Breve* を含める事が適切である。これらの本は広くは文法の伝統という視点から、そして Varo の文法という視点からも文章化されなければならない。広くドミニコ会文法書の起源および Varo の『アルテ』を評価するには、これらのテキストを文脈に置く事がぜひとも必要であり、「ドミニコ会の伝統」を定義する最良の手段である。

最後に、有名な Joseph Henri Marie de Premare(1666-1736以下)による *Nottia Linguae Sinicae* のような後期の文法書もここで考慮される。さらに、ローマ宮廷への使徒の報告書もこの分析に含まれる。それらは宣教団が経験した中国語学習と教育、更に彼らが直面した言語に対する認識と、現代の読者が関わるための情報を提供する。いかに西洋の言語学の考えが中国に紹介されたか調査するために、実際に中国に送られたヨーロッパの書籍、中でも当時おそらく参考資料として宣教団で用いられており、中国でのギリシャ・ラテン語遺産の普及に貢献した、Neburija によって編纂された数冊のラテン語文法書について指摘する事は重要である。印刷されたラテン語の文法書の多くは、海のルートでセビリアからアカブルコ経由で広東に到着し、そこから福建の托鉢修道士のもとに届けられたと考えられる。

### 3 Francisco Varo についての伝記的記録

Francisco Varo は1627年10月4日にセビリアで生まれた。彼のドミニコ会修道士修練期間は1642年10月7日に彼の出身地にあるサン・パブロ修道院で始まり、1643年10月8日にドミニコ修道会に入会した (Gonzalez1955)。その同じ年に、Juan Bautista de Morales が中国宣教団から戻りローマ経由でスペインに到着した。Morales が彼の宣教団への志願者を募集したため、Varo は Holly Rosary Province に入会后 Morales をリーダーとするドミニコ会宣教団に参加、1646年6月12日に Sanlucar de Barrameda からベラクルーズへと出発した。彼はメキシコで司祭に任命された。しかしオランダ駐留軍が1647年の春に全てのガリオン船がマニラへ向かう事を妨げたため、ドミニコ会宣教師達は1648年4月12日まで旅行を続ける事ができなかった (Cummins1962,1986)。宣教団はメキシコからマニラへ向かい7月1日に到着した。Varo は中国宣教団に選ばれたが、官話の完全な知識を得るため、最初フィリピンに1年間滞在し中国人社会で暮らした。1649年7月10日、彼は Morales をリーダーとするドミニコ会とフランシスコ会の修道士からなる小さな宣教団とともに、マニラにほど近い Pasig から離れた。8月3日彼らは福建省の廈門近くの港町安海の南に到着し、そこからさらに福安にある伝道所

へと向かった (Gonzalez1955)。修道士達が中国に到着した時は国姓爺 (1624-1662) の支配力が強く感じられた頃であった。明の忠臣国姓爺、またの名を鄭成功は、清に対する抵抗運動において傑出した人物であり (Struve1984)、少なくとも1650年から福建省沿岸を支配し、廈門を本拠地として豊かな沿岸都市を略奪し、その活動範囲は浙江省の南部から広東省北部まで広がっていた。彼は日本、琉球、ベトナム、タイだけでなく、フィリピン人や中国にいるヨーロッパ人とも接触を続けていた。

1662年清朝政府は、地方の人々の援助により強大化していた国姓爺の力を弱めるため、山東省から広東省までの全沿岸地域からの撤退を命じた。しかし、この政策によりポルトガル軍、スペイン軍、オランダ軍は沿岸地域に対してより強い支配力を持てるようになった (Gernet1972)。要するに、福建省にいた聖職者はわずかであった。ドミニコ会修道士 Juan Peguero (1691)の記録によれば、Varo は使徒としての仕事が福安に定められていなかったため、福安にいる間方言と官話の研究に没頭していたが、そこには多くの彼の信奉者がおり、さらには福寧府や福州にも信奉者が広がっていた。1673年2月11日の日付のある彼の往復文書によれば、Varo 自身彼が福州の方言にも通じているという確信を持ち始めている。彼の官話の知識はあまりにも印象的だったので彼の同僚は彼の雄弁さを心から賞賛している。彼は法廷や公的な聴衆の前で官僚によって用いられる、難しく非常に公的な談話形態に熟達している事で有名であった (Salazar1742)。彼のすばらしい言語技術のために、Varo は修道院長によって新人宣教師の言語教師に選ばれた。彼はその布教活動によりついに1671年から1672年まで広東に追放された。宣教師としての職務の間、彼は数回地方分区分長代理に指名されている。彼の死の直前である1687年1月31日、彼は広東省、雲南省、広西省地区の教皇代理に選ばれている (Gonzalez1955)。

#### 4 Varo の著作

Francisco Varo は数多くの手紙や報告書を使って、福建での実り多い伝道生活を記録した他作の作家であった。それらはスペイン語で構成され彼自身の手書きであった。ほとんどは今でもオリジナルの稿本として存在している。宗教問題に関する彼の専門論文の幾つかは編集されたり他のヨーロッパの言語に翻訳されている。彼の著作の数、量、そして質は、彼が1649年に福建の宣教団に加わった1年後から始まった数知れぬ厳しい迫害に堪えてきた事を思えば驚嘆に値する。Varo が報告書で認めるように、彼の稿本の多くが宣教師としての活動期間中印刷される事がなかったのは、主に資金不足による (1673年2月11日と1671年9月18日の Varo の手紙)。彼の著作は様々な理由から重要である。彼のスペイン語の往復書簡は第一次史料として、当時の伝道生活と伝道活動の結果に関する詳細な情報を与えてくれる。

しかしながら、文化的偏見から全く自由であったわけではなく、それゆえより適正な判断を下すために文脈化されなければならない、ヨーロッパ人の東洋に対する認識に影響を与えた動機要因に対する Edward Said の批評的所見に注意すべきである。偏見が見られる一例

を挙げれば、実際これらの報告はローマ法廷に宣教団への賛同と援助を納得させるためのものであった。今は言語記述の特質を決定する支配要因を明らかにする試みとして簡単にこれらの問題を扱えば満足であろう。

次に Varo の言語学的著作の起源について述べたい。Varo は彼の手紙の中でいつ彼が官話の基礎を学び始めたのか、どこで完成させたかについて明白には述べていない。彼は自分の文法書を新たに編纂した Pedro de la Piñuela が本の付録として加えた十戒を伝授した人物であるフランシスコ会修道士 Basilip de G(l)emona(1648-1704)について直接言及はしていない。Varo は Piñuela の事を彼の往復書簡の中でドミニコ会に福建である書物を供給したと暗に述べているだけだ。後ほど示すが、Nebrija のラテン語文法書がこれらの本の中にあっただろう事を示唆する幾つかの証拠がある。1673年、Varo は福安で改宗について学んでいた友人に改訂してもらうつもりですでに大量の著作を編纂していた(1673年2月11日の Varo の手紙)。しかしながら、彼は自分の言語学的概念を中国語の文法書に導入する過程については詳しく述べていない。加えて、彼はさらに2冊のローマ字化した中国語の辞書を書いている。

1冊はポルトガル語で書かれ、Vocabulario da Lingoa Mandarina という書名で、彼が拘留される少し前の1670年に福寧で完成された。もう1冊はスペイン語で Vocabulario da Lingoa Mandarina(1692)という書名である。彼の著作はそれから広東或いは廈門経由でマニラ或いはローマに送られた。Varo によれば、本の輸送は当時廈門への道が満州軍によって封鎖されていたため更により困難であり、廈門港からヨーロッパへ船で運ぶことができた本はなかったという(1679年10月29日の Varo の手紙)。追放の間ですら彼は生産的であった。この間、1671年に、彼は Manifiesto と Declaracion という「典礼問題」を本質的、直接的に伝える2本の宗教論文を書いた。1671年から1673年の間は、彼は思い病気にかかり広範囲に渡る著作からは遠ざかっていた(1673年8月14日の Varo の手紙)。次の年から1677年までは、彼はより短い手紙を書いたが、それらは彼の初期の研究論文である Manifiesto の比較にはならない。この間増加する改宗者や新たな聖職者に対する要求が主な話題となっている(1677年8月17日の Varo の手紙)。おそらく、彼の最初の『アルテ』はスペイン語で書かれ、1677年以降に始められ1682年に完成したと思われる。

Varo の宗教冊子に関する幾つかの意見のまとめとして、特にローマ法廷の下した決断に強い影響を与えたと報告されているイエズス会との有名な「典礼問題」で Varo が果たした役割は、前任者である Morales の影響を受けている(Salazar1742)と述べなければならない。彼の著作は在東インド・中国ローマ教皇大使の法令だけでなく、使徒の務めに関する「キリスト教布教聖省」の日々の決定の根拠となった。

##### 5 ドミニコ会宣教師によって創始された文法研究

しばしば「ヨーロッパの拡大の時代」(Neill1986)と特徴づけられる16世紀に、様々な修道会の宣教団が中国へと旅立ち始め、まもなく彼らが出会った言語の文法の記述を始めた。彼らの中国人とその言語に対する認識は、東洋に対するヨーロッパ人の多岐に渡る興味およ

び様々な宗教団体の設立という外延の中で評価すべき (Said1979) としても、個々の解釈を考慮する必要がある。Boxer1953はすでにドミニコ会員によって始められた言語記録の価値について注目している。彼らの言語記述は中国では中核的役割を果たしながらもしばしば軽視されてきた。そして Varo の文法書と密接につながっている。ドミニコ会言語記述をめぐる論争は彼らが中国滞在中に出会った中国南部地方の方言、特に福建省の方言により注意を向けていたという事実に基づいているようだ。しかし、彼らは中国の官僚階級によって使用されていた言語、すなわち官話にも興味を持っていた。彼らは中国の方言だけでなく最初の標準語の記述文法も製作した (Gonzalez1955, 1956; 1966)。イエズス会が文法理論にあまり関わらなかったのは、おそらく教育システムがドミニコ会と若干異なっていたためであろう。それは伝統的に口述であり、新たに中国宣教団に到着したイエズス会員はすでに言語を知っているより経験豊かな教父から教わる (Lundbaek1980)。おそらく、彼らはドミニコ会に勝るとも劣らず中国語の文法に興味を持っていたが、彼らの言語の習得と伝授の方法は異なる道をたどり、広く教科書を使用する事なく直接中国語を教えた。この方法が有効であったのは、イエズス会が中国に長い科学的伝統を有していたためである。しかし、イエズス会もまた教科書を通じた中国語学習に興味を持っていた可能性も認めざるを得ない。

最初の言語論文を製作した開拓者としてドミニコ会の業績を文脈化し、またこの分野の研究をより容易にするために、彼らの中国居留地をとりまいていた状況と、中国とフィリピン諸島で行われていた彼らの言語事業についてこれから述べようと思う。最初のカソリック宣教団が中国への道を見つけたのは早くも13世紀であった。16世紀に中国宣教団の出発点となったのはフィリピン諸島であった。フィリピン諸島は幾つかの理由から宣教団の本部として最も適当であると考えられた。第一に、中国とフィリピンの間にはすでに通商関係が存在していたため両者の間の接触が容易であった。そしてマニラはヨーロッパと中国の物資交換の中心地となった。総督 Miguel Lopez de Legaspi の統治の下、1565年にフィリピンがスペインに占領されたとき、彼らはこの既存の施設を活かす事ができた。スペインのドミニコ会員は1587年にフィリピンの Holy Rosary Province 設立により、正式な中国宣教団を創始した。1586年7月17日、40名の聖職者がカディスからベラクルスへと向けて航路を取り、続けてメキシコに上陸した。残った宣教師はアカプルコから船でマニラへと出航し、その間彼らのうち3名がマカオへ進んだ。1587年7月25日、15名のドミニコ会員がマニラに到着した (Ocio y Viana1895)。第2に、マニラは、マラッカとマカオとゴアの一部を支配していた彼らの敵、イエズス会に支配されていない場所であったので、ドミニコ会員は自由に活動でき、宣教団本部を置くにふさわしい場所であった。これらの理由により、フィリピンはスペインドミニコ会宣教団が中国へ向かう出発点となった。1565年アウグスティノ会がフィリピンでの活動を始め、1578年フランシスコ会がそれに続き、1581年イエズス会が続いた。1579年メキシコ大司教の指揮の下司教管区が設置された。1620年には広大な聖職政治が設置された (Cummins1986)。フランシスコ会の集中的な言語習得のための正式な言語コースが新しい



宣教師に用意された。この言語教授方法では目標となる言語以外は排除する事が必要であり、言語クラスや個人勉強の時間中はラテン語やスペイン語を話すいかなる試みも妨げる厳しい手段が適用された。1604年頃に宣教師の中国語技能を計る正式な試験体系が確立された (Cummins1986)。しかし中国語学習におけるフランシスコ会の努力には議論の余地がないわけではない (Biermann1927 上述の Cummins より)。フランシスコ会記録保管所の資料に対する批判的な調査が今後望まれる。ドミニコ会員がマニラに逗留した目的は中国への入国手段を得るためであった。ドミニコ会宣教師 Miguel Benavides(1550-1605)と Juan Cobo が1587年と1588年にそれぞれマニラに到着したとき、彼らに与えられた仕事はフィリピンでの聖職活動と中国語学習への専念であった。彼らは数冊の言語学習に利用できる中国語のテキストを所有していた。例えばマテオ・リッチ (1552-1610) の公教要理があり、これは1548年に肇慶府で印刷されたもので中国人によってマニラにもたらされた (Biermann1927、Sommervogel1894 No.28)。Benavides はフィリピンで最初のドミニコ会宣教師であった (Ocio y Viana1891)。1593年にそこで作られた最初の印刷機が以前 Santo Tomas 大学に設置されていた。その年に印刷された最初の本は2冊の告解の手引きで、1冊はスペイン語とタガログ語、もう1冊は中国語の漢字が用いられ、中国の伝統的な木版印刷方法で印刷された。1602年、移動式の印刷機が作られた (Gonzalez1956)。しばらくドミニコ会の言語研究について詳しく述べたい。ドミニコ会には、Gonzalez によって少なくとも182の言語冊子が記録されており、それらの内半数以上は中国語に関わる。ドミニコ会に由来する文法手引き書は76もの多大な数に達し、おおよそ32の異なる方言を扱っている (Gonzalez1955)。マニラのサン・ガブリエルで、Benavides は1588年と1589年の間にフィリピンで最初の中国語の公教要理を作成し、その題名は *Catecismo de la Doctorina Cristiana en Caracteres Chinas* であった (Gonzalez1966, Ocio y Viana1895)。中国語に精通する事は初期宣教師の Benavides と Cobo にとっては困難な仕事であった。彼らはおそらくリッチの中国語公教要理以外に、目的を達成するための手助けとなる資料をあまりもっていなかった。(Biermann1927)。Cobo は初めて方法論をもって中国語の方言、すなわち廈門周辺で話されていた方言を記述した。Varo が『アルテ』の中に使用した考えの起源を辿るとき、彼が往復書簡の中でこの貴重な稿本について言及しておらず、彼の同僚 Francisco Diaz(1606-1648)の作とされる2冊目の官話文法書について言及している (Gonzalez1955) 点は注意する必要がある。おそらくこの文法書は Diaz がフィリピンで中国語の辞書を作成した1640年か1641年に書かれたようだ (Gonzalez1966)。Varo 自身この著作を彼の *Manifiesto* で認めている (1671年9月18日の Varo の手紙)。Diaz は Cobo と違い、中国宣教師団に割り当てられた。Diaz はセビリアとアカプルコ経由でマニラに到着した。彼は当時 Parian として知られた中華街とサン・ガブリエルの病院で中国語の勉強をはじめた。1634年彼は台湾へと出発しそれから福安にあるドミニコ会宣教本部へと向かい、1635年に到着した (Ocio y Viana 1895)。さらに前任者である Morales もおそらく Varo の文法書に関わりがある。Varo は直接 Morales と Diaz の言語事業に関わっていたのは間違いない。Varo の報告によれば、彼らの中国語記述は当時広く行われていた

言語観の更なる発展に欠かせない「完璧で」「わかりやすい」文法であった (Manifesto)。著者は一般に Morales の作とされる Varo の所有する *Manuale pro missionariis* しか見たことはないが、この論文はほとんど「文法」と呼べるものではなく、実際たった3ページからなる10箇条のサマリーでしかない。この事から Morales の「本当の」中国語文法書はおそらく我々が見たものとは一致せず、それどころか未確認であるかおそらくもはや現存しないと考えられる。この *Manuale* に関しては、Varo がその幾つかの章を『アルテ』の構成に使用した証拠があり、またおそらく Morales の分かり易い考えを参照したと思われる。この2書の相関関係を説明するためには、2、3の例を挙げれば十分である。証拠は *Manuale* (Morales1743:136-149,152-156) の7章と8章の「丁寧語と小詞」、「能動文」についての1節に見られ、これらは話題の順序と文型が Varo の『アルテ』(Varo1703、11、14-16章)と似ている。

## 6 Varoに見えるギリシャ・ラテン伝統言語学

ここでの目的は Varo の中国語観に貢献した初期言語学の主な傾向をたどる事と、彼の中国語の構造の捉え方に与えた仮定的「影響」を発見する事である。まず最初に、彼がよく知っていた言語観について考えねばならない。彼の作品にはギリシャ・ラテン伝統言語が主なパターンとして現れる。関連する幾つかの要素について、概略をここに記す。現代言語学の観点から見て最も興味深いのは、彼のテキストに見られる「八品詞」である。これは Dionysios Thrax の作とされる有名な古いギリシャ語の文法書 *Techne grammatike* (紀元前100年)に見られる。この文法書はギリシャ言語哲学の影響のもと、1300年に渡って標準ギリシャ語文法となり続けている(Sandys1964,Robins1958)。この「八品詞」には、下位カテゴリー、数、性、格、様態、時制等が含まれ、形式、機能或いは統語論的基準だけでなく意味論によっても定義される(Arens1980)。さらに Arens の指摘によれば、Thrax の八品詞による文分割とは、すなわち名詞、動詞、分詞、冠詞、代名詞、前置詞、副詞、接続詞で、現在に至るまで全ての後の世代の言語学観の骨組みを形成している。これはとりわけローマの文法学者にとって真実であった。ローマ人—Marcus Terentius Varro (紀元前116-27) を含む—はギリシャ言語理論をラテン語に取り入れた。彼らの *ars grammatica* とは *Techne Grammatike* (技術としての文法) という用語を直訳したものである。文法的 *ars* (技術) とは詩的さや文の *figurae* (形) と同じく、音韻論、品詞、言葉の間違った使用例からなり、その外延は次世代の言語思想に影響を与えた。数世紀に渡り、Donatus と Priscian は権威ある書と考えられていた。Donatus (4世紀) は初心者向けで (「a Donat」といえば「初級教科書」を意味した)、Priscian (6世紀の初め) は高等学生向けであった。(「a Priscianist」とは「文法学者」であった)。Dummler-Cote (1987) の考えによれば、ローマ人は Thrax をコピーする事により彼の文法システムを保存し、その延長として彼らは単に八品詞に必要とされるためだけに、ラテン語には存在しない冠詞と間投詞に相当する造語を設置した。この方法はおそらく、ある一定の範囲内で、ラテ

ン語のような形態言語にとってはきわめて有効であるが、中国語のような非屈折言語の言語分析にギリシャ・ラテン語の枠組みを適用する事は、Varo によって提案されているように、確かに論議を引き起こす。Varo のラテン・カテゴリーは論争の余地があるため、より徹底した分析が必要である。Varo の文法がはぐくまれた伝記的科学的状況を念頭に、彼の作品にギリシャ・ラテン語文法が見えるのは、中世になってもほぼ変わることがなかった、かくも強力で影響力のある *Traditio* (伝統) の反映であるという事実に注目したい。ラテン語は学校教育と同じく教会言語としてその機能を果たすために優勢な役割を保持していた。

Arens1980によれば、この時代を通じての言語研究の中心題目は、Priscian 批評と全ての言語に応用できると信じられていたアリストテレスの10の普遍カテゴリーに基づいた哲学文法の拡張批評であった。全ての言語の理論構造を方法的に説明するのに普遍言語であるラテン語を適合させたため、ラテン語文法は言語の「科学」となった。ゆえに Varo の言語ユニットがラテン語文法をモデルとして作られたのも驚くべき事ではない。宣教師達はラテン語に精通しており、その言語分類法を熟知していた。彼らにとってラテン語は、作品の中で何か新しいものを熟知した方法によって記述し、対象の理解を促進するための比較の基準を形成していた。彼らにとってラテン語の選択は的はずれなものではなく、新しく複雑な対象をより理解するための実用的な道具を意味していた。加えて彼らはおそらく、彼らの中国語に対する認識と比較言語としてのラテン語の的確な選択に深く影響を与えたラテン語を「高く信用」していた。このラテン語構造の採用は、その頃流布していた科学的環境の中では理解できるものであったけれども、彼らの選択が中国語の文法概念のさらなる発達に与えた影響を考えると批判を免れない。おそらく初期宣教師達は、宣教団に入った新修道士のために、言語を習得するという困難な仕事をより軽くしようと考えていただけであろう。「ラテン語のレンズ」を通して中国語を見る事により、ある態度が形成された。それはラテン語という研究方法を採用した事により、後世の言語研究に最も強い影響を与え、2世紀以上に渡って中国語の真の構造に対するより深い理解から遠ざける事となった。その結果として、ラテン語は中国語文法研究の発達を不幸にも締め付けることとなった。

## 7 Varo の『アルテ』と関連する17世紀と18世紀に於ける *ars grammaticae* (技術としての文法) についての見解

Varo の中国語文法書の名称である *Arte* とは17世紀から18世紀に行われていた技術としての文法と関連している。多くの中国語と日本語の教科書は同じように *ars* と名付けられており、表面上は1822年に Abel-Remusat(1788-1832)によって書かれた *Elemens[sic] de la Grammaire chinoise* や、1815年にプロテスタント宣教師ロバート・モリソンによって編纂された *Grammar of the Chinese language* のような約100年後に出版された文法論文とは区別されている。技術としての文法についての言及は主に初期托鉢修道士のものに見られ、また一部のイエズス会の文法書、すなわちアウグスティノ会の Juan Rodriguez によって1776年に完成された中国語の *Arte* や、イエズス派の Jaro Rodriguez(1561-1634)によって1604年から1608年の間と、1620

年に作られた2冊の日本語文法書の中に見られるが、少ない。従っていかにしてギリシャ・ラテン言語分類概念が東アジアの言語に応用されたかという問題には幾つかの思索がなされなければならない。この目的のためには、まず西洋学の基礎を築くのに用いられた原本を調査しなければならない。これはおそらく西洋に見られる技術としての文法の特徴を詳しく見ること、さらには初期宣教師の言語学がこの概念と結びついた方法を批評的に評価する事によってなされるであろう。Bossong1990によれば、中世では文法とは *ars* すなわち技術であり、文字通り能力を意味する *art* であると理解されていた。ゆえに、文法は中世の大学では下位の三学に含まれていた。文法が技術 (*ars*) の一部と見なされるべきか、科学 (*scientia*) の一部と見なされるべきかという疑問は17世紀の論争対象となった。

文法が科学である可能性は、オランダ人道主義の伝統から発展した有力な古典派文学の奨励者の一人である Gerardus Joannes Vossius(1577-1649)によって否定された。Verbueg1981は当時の一般的な文法に対する理解を以下のように定義している。*ars* としての文法は不特定の言語の言語学的叙述(著作)を達成するための不特定の技術として見られる。このようにして *ars* は、*scientia* であり機能(会話の基本機能である言葉、パロール)として人類のスピーチに関係する *grammatica naturalis* (文法の本質)とは区別された。Vossius は次に、言語とスピーチ研究の復興を奨励するイタリアの Lorenzo Valla(1406-1457)に代表される言語理論の影響を受けた。この場合、三学の「技術」はある人道主義的特性を見せている。その頃修辞は文法よりも影響力のある役割を果たしていた。Verbueg の意見では、修辞は常に三学の「言語技術」の最も動的な部分で、スピーチに最適な能率の良い雄弁さを目標としていた。人道主義の開始から主要な焦点は「技術」は「知識」より優れ、「行動」は「抽象」より優れていると評価する事、すなわち、実践と応用は「観念的思考」より優れ、「能力」は「熟考」より優れ、「内容」は「理論」より優れていると評価する事であった(Verbueg1981)。抽象的思考や熟考よりも実践的用途と能力を好むことは当時の言語学の考え方に反映され、Varo の言語記述にも等しく現れているが、Varo の言語観を直接 Vossius や彼と同時代の思想家と結びつけようとする意図はない。

しかしながらこれらの言語観は当時のヨーロッパで流行していたもので、中国に向かった宣教師の文法全般、ひいては中国語に対する見解に何かにつけ大きく貢献したであろう。Vossius はおそらく当時の世論に影響を与えており、ゆえに Varo が当時のヨーロッパに広がっていたそれらの傾向をよく知っていたと主張することははずれではない。私の考えでは、中国に見られたヨーロッパ人の考え方自体よりは、むしろこの文法概念の実際の用途の方が重要である。*ars grammaticae* (技術としての文法)に於ける Vossius らの実践的理解により、学習者はスピーチで感銘を与える事を獲得し、正しい語順と文構造を学び、適切に言葉を選び、明瞭に発音する事が可能となった。Varo は『アルテ』ではっきりと述べているように、彼にとって説得力のあるスピーチは当然言語学習の際とても必要なものであった。彼はまた学習者に単に形式的な基準を習得しマスターする事に専念するのではなく、「エレガント」

なスピーチ術を目指すよう警告している。そのような言語能力を獲得するために、学習者は規則に頼ることなく、その代わり完璧な中国語を話す人々を熱心に見習い (el uso、慣用法)、彼らの言うことを正確に繰り返さなくてはならない。16世紀のスペイン言語学で重要な役割を果たした言語の慣用法と規範 (uso y norma) のためのスペイン語の模範は Pozuelo Yvancos1984によって明示されている。ゆえに発音の正確さは Varo にとって極めて重要であった。そしてこれが、ほんの1例であるが、彼が1章全体を音韻の問題に捧げた理由である。要するに、彼の入門書は全般に中国語の学習を始めたヨーロッパ人の言語習得をより容易にするために、平易で分かり良く書かれたものであると言える。

## 8 Varo の文法に見られる Nebrija の影響

Varo の文法の本質的な構造を分析すれば、彼が Antonio de Nebrija(1444-1522)の書から強い影響を受けていることが分かる。このスペイン人の文法学者についての最初の言及は Varo の1703年版の序文に見られる。Nebrija の名前はまたテキストの後半にも引用されている。比べてみると、Varo の稿本は Nebrija について一切言及していない。この事が示すのは、例えばこれらがスペイン語の原本として存在していたとしても、おそらく Pinuela によって伝えられた付け加えである。10章で、再びこのテキストの著者は Nebrija についてはっきりと言及している。従って Nebrija の「文法」観はヨーロッパにおける彼の学説の権威も含めて、考慮に値する。Garcia de Diego1944によれば、Nebrija の教訓的なラテン語文法は、最初1481年サラマンカで出版され、その後200年に渡ってラテン語文法研究にとっての標準参考図書となった。Gonzales Llubera1926によれば、Nebrija は4世紀の文法学者の教えを継承するだけでなく、当時の知識を拡張させるのに必要なものとして適合させ、スペイン人道主義に新たな時代を築いたと信じられている。

宣教団の文法に於けるラテン語の影響に関連して、ヨーロッパの本がどのようにして中国に渡ったかという疑問が出てくる。そのためには17世紀から18世紀にかけて福建の宣教団にたどり着くためのルートを辿る事が有益である。中国にラテン語の文法書が輸送された事を証明するものが船積み品目録に見える。セビリアの Archivo General de Indias で見つかった1586年と記載される目録では、確認された555のタイトルの中から Nebrija の名前が6つの記載事項中に見られ、実際には彼の後期に編纂された3冊のラテン語文法書と3冊の辞書であった。セビリアにある同じ記録保管所にはまた幾つかの1669年から1766年の間に中国へ送られた文法書の明示されていない記載がある。おそらくこれが当時流行していたヨーロッパの知識と考えを東アジア一帯に広める事のできる方法であったのだろう。Nebrija の影響は Varo の本の基本的な構造と内容の両方に見られる。従って、我々は Nebrija の文法のある側面を説明する事が Varo の作品がまとめられた方法を理解するのに有効であると考えられる。

Nebrija の文法は2つのパートから構成されている。最初のパートは形態論から構成され、次のパートはシンタククス、正字法、韻律学、修辞、比喩そして短い用語集から構成される。Varo の1684年の稿本では、それに応じるように彼の中国語文法書の最後には用語集が収め

られている。実際の所、Pinuela によって作られた1703年版にはそのような語彙集は見られない。Nebrija 文法のラテン語本文は分かり易く簡明な散文で表されている。Garcia de Diego1944によれば、「これはまさに中世的な子供っぽい単純さであり、その簡明さ、道徳的価値観、首尾一貫した注意喚起とともに、広くかつ詳細な知識を得たいというルネッサンスの切望と関連しており、それは彼の新しい文法概念に象徴されている」。Varo が自分の文法観を表現するために使った文体は Nebrija の入門書に用いられるのと同様単純で分かり易い。Nebrija もまた、文法や辞書を書くにあたって無から創造したのではなく、同様にその先人達から恩恵を受けている。例えば Quintilian(35-95)は、彼が直接従った古典の一つである。Quintilian を做って、彼は語形変化と活用の解説に於いて「学生が最初に知らなくてはならないもの」(Quintilianus1970)と始めている。Varo の音韻論に関する2章は Nebrija の第3冊の第2パートと一致し、それは伝統的な Erotemata からなる。1703年版の3章から12章は Nebrija の Introductiones の第1冊から第4冊に見られる。Nebrija の最初の本における語形変化と活用、品詞の扱いに類似したものが Varo の『アルテ』の3章に見られる。Nebrija の第2冊の内容が Varo の文法書の5章から9章に見られるが、Varo のテキストブックでは章の順番が少し変えてある。第3冊の Erotemata は Nebrija の入門書の中心部分であり、また彼と Varo の『アルテ』とをつなぐ要素として機能している。Nebrija の伝統的な正字法は音或いは文字からなり、その分類は現代の言語学用語では音韻論となる。そして同じものが Varo の文法書のちょうど序文の後に表れる。Varo は Nebrija の入門書に見られる論題の順序を変えるときはいつでも、明らかに記す必要があると感じていたようであり、それはこのラテン語文法が当時持っていた権威を示すものでもある。

次に Nebrija と Varo の文法書に用いられた用語と方法を詳細に調べてみたい。Varo の6章と7章は Nebrija の文法の4部を参照している。8章は Nebrija の5部の最初のパラグラフと一致し、これは音節とアクセントすなわち韻律学に関するものである。この章では、Nebrija の文法記述は概して文法形態の説明に限定されている。それまで中国語に適合すると信じられていたラテン語の八品詞に分類するつもりであった中国語の不変化詞を、Varo のテキストでは特有の機能であると推測している。Nebrija のように、Varo は多くの文型を道徳的或いは宗教的内容とともに使用している。そしてこれが Nebrija の方法を容易に Varo が利用できたもう1つの理由であり、この資料は中国語からキリスト教への変換に容易に適用できた。結論として、典拠の調査により Varo が Nebrija の文法概念をモデルとして広く使用していたことが立証された。Nebrija の方法は1703年版と1684年稿本の両方に明らかであり、Pinuela は同じ型に従って Nebrija の Introductiones を1703年版のモデルとした。ラテン語の体系は初期宣教団に「中国語という現象」にとりくむ努力を実行可能とする手段として提供されたようだ。ラテン語の研究は言語に対する心構えがどうやって形成されるかという仕組みに対する洞察力を提供し、哲学や言語学全般と関連している。なぜ初期宣教団はラテン語の構造を中国語の言語学的分析の基礎として選んだのか。何がその選択を好意的なものとしたのか。

まず、モデルを用いて複雑な問題自身を表現しようとするとき、その選択と適用は常にその問題資料をある特定のやり方で見ているだけであり、それはその言語自身に固有のものではなく、単に問題となっている資料をより本質的に理解しようとする試みを表現する方法でしかない事に注意すべきだ。もちろん言語教育としては、その問題に直面している共同体に親しまれている方法を用いて組み立て分類する事で、より効果的に言語を学習し或いは教育する事が主な目標であろう。ところが、例えば「ケース」という概念は最も一般的なギリシャ語・ラテン語への実行可能な研究方法として認められているが、この論点は中国語のような非形態言語と関連すると大変異なる様相を呈する。Varo が中国語を記述するのにラテン語のカテゴリーを受容した理由の一つは確かにこの熟知していたという特徴によるようで、それはある共同体が熟知していた「よく知っている」「既知の」類似したものを通して「新しい」「未知の」ものを記述するとき重要な役目を果たした。この原則はまた別の領域、例えば文芸理論と歴史にも見られ(White1)、同様に言語史編纂の分野でも証明されている。

中国宣教師、特にスペインのものは、ラテン語のカテゴリー及び Nebrija の有名なラテン語文法を熟知していたと思われる。さらに、Varo 自身 Nebrija のテキストをよく知っていた証拠が序言に見られ、そこでは中国語は「高度に修辭的な」言語として紹介されている。この事から導かれる仮説は、おそらく彼は西洋の言語構造が中国語より重要であると考えたためにラテン語のカテゴリーを中国語文法に適用したのではなく、単に彼にとって実用であったためであろう。このような状況から、第2言語の習得における第1言語の干渉は言語教授と学習の歴史という視点から論じられるべきだと言える。熟知した知識を言語記述に使用するという Varo の方法を強調して見てきたが、彼の文法に見られるような革新的な要素もまた言及するに値する。次にラテン語のモデルから独立して出てきたように見える Varo のアイデアを全て「革新的な」ものとして述べたい。これらはおそらく Varo 自身の言語に対する意見であり、ゆえに当時言語と記述文法がどのように理解されていたかについての情報をもっと提供してくれるのではないかという興味がある。革新的な要素が確かに調査に値するのは、先の言語理論による先入観がおそらく少ないであろうと思われるためである。ゆえに、私が特に関心を持つのはこの Varo のオリジナルであると伝えられる「先入観のない」言語思想である。しかしこの問題を扱うにあたっては、とりわけ教授法の助けとなることが第一に意図された宣教師の貢献は大きく状況に束縛されるために、Varo による独立した認識のように見えても一定の先入観を持っている点に注意しなければならない。Nebrija モデルからの幾つかの逸脱は『アルテ』の序言に見られ、広くは初期宣教師文法全般にも見られる。これらの記載はパリにある Nebrija の1895年版のラテン語文法には存在しない事から、Varo が提示した革新的形式であったと考えられる。Varo はまた他にも、ヨーロッパの言語に見られるものとはかなり異なり学習が困難とされていた、中国語の音韻体系を修道士に分かり易くする必要性から、新しいアイデアを音韻論の第2章に追加して紹介している。さらにまた別に新たなアイデアがテキストの最終章に表れている。ここでは異なる慣習と、公的な儀式の場で遵守されなければならないしきたりが詳しく説明されている。これらの項

目は、言語学や文化史の点で興味深いばかりでなく、宣教師の作品として文法が果たした役割と明らかに関係する。現代の学術用語としてはこの部分は「社会文化学」の要素として示すのが最もよいであろう。

### 9 Varo の文法のモデルとなった宣教師文法

この節では、すでに述べたようにおそらくもはや現存しない、1682年に書かれた最初のスペイン語の稿本の特徴を結論づける試みとして、ラテン語の稿本と1703年版との原文の比較に着手する。17世紀の後半には少なくとも2つの原本、すなわち1682年に Varo によってまとめられたスペイン語のもの、1684年のラテン語のものが存在していた。また更に1682年に書かれた3つ目のオリジナル稿本に関する文献証拠もある (Gonzalez1966)。Witek1982によれば、この最後の版はラテン語のオリジナルからのコピーであり、おそらく1699年に Jean-Francois Foucquet(1665-1741)が行ったもので、30葉からなり、大判に小文字で書かれている。何人かの著者により1835年にナポリで出版された後の版である、*Grammatica linguae Sinensis auctoribus Padres Varo et de Cremona* と関係する事が述べられている。おそらく、1682年の Varo の最初の稿本はスペイン語で編纂されている。これらの異なる版がどう関連しているかをよく見るためには、まずここで問題となる印刷版の最初の著者をたどり、次に書き方と思考が実際にいかに発展したかを示す事が必要である。これは Varo が執筆の過程で中国語に対する認識を変えたかどうかを指し示す事になるであろう。

これらの稿本の関係を判断する方法は幾つか考えられる。ラテン語版がスペイン語稿本の単なる翻訳だというのが1つの考えられる解釈である。その目的は宣教師にとって有益で有効な道具としてより広く修道士に普及させるためであっただろう。Varo の往復書簡に、彼はテキスト完成の数年前には、ドミニコ会の同僚から何の援助も得られなかったという証拠がある。次に考えられる解釈は、Varo が最初の作品を改訂し変更するために2冊目を編纂したというものだ。そうするとラテン版は修正し改訂された版となる。ラテン語稿本がオリジナルテキストを少し変更して翻訳したものである可能性を示すものとして、この2冊の相互関係と相違点を以下に幾つか表す。

Varo の1684年ラテン語稿本は短い中国語の大要で始まり、多分実質的な序文として意図されたものである。稿本には1703年版の序文と同じものは見つからない。問題の稿本の最初は、実は、1703年版の第1章とよく似ている。これは Piñuela が自主的に1703年版に序文を付け加えた事を示している。要するに、稿本の対応する本文は印刷版の第1章よりも簡潔である。それは官話には活用も語形変化も存在しないという意見で終わっている。しかしこの点は、稿本の後の版ではもっと後に、第3章で見られる。Piñuela が序文を書いた事を示すさらなる証拠が1703年版に見える。ここでは最初の人物により著者は「20年以上」中国に滞在したと報告されている。しかし Varo の伝記によれば、それどころか、彼が著書を完成させた時にはすでに30年以上福建に滞在している事が明らかである。Piñuela が序文を書いた証拠



は他にもある。それには Basilio de Gemona が山西の教皇代行に任命された事への言及が含まれている。しかし彼がその榮譽ある地位に昇進したのは、もっと後の1696年であり、彼の任命を伝える教皇の勅書は1700年まで中国の宣教団には届かなかった。これはこれらの系統は直接 Varo から始める事はできなかったという結論を証拠立てる。

更にももちろん全く同じではないが、1684年稿本は1703年版と内容の表示と同じく話題の配列において一致を見せる。概して、文法内容は段落や例証を含めておおよそ同じ順番であり、若干の構成の変更が見られるにとどまる。第一に、稿本は章によって整理されておらず、見出しによって構造的に分けられる。1684年版における語形変化の説明は後の版と非常によく似ている。それでもごくわずかに見せる逸脱は、ある前置詞から始まる節であり、その章は大体に於いて両方の版が一致するにもかかわらず、印刷版ではほかの場所に現れる。次に、両方の本文で同じ例が使われている場合がある。例えば、wèi wǒ děng qí (為我等祈：我らのために祈る) (Varo1684, 1703) がそうである。副詞に関する節では、筆者が情報源として挙げた語彙集への言及が見られる。もしそれが Piñuela の言葉なら、彼は Varo の書についても言及しているであろう。別の解釈ではこれらの系統はより初期の情報源である、おそらく Francisco Diaz か Juan Bautista de Morales の文法記録から取られたものとなる。

両方の版の文構造に関する章を比較する事により問題はさらにはっきりとする。先の文法についての言及はラテン稿本にはなされておらず、1703年版のみである。そこには異なる解釈が考えられる。おそらく1682年の原本にはその承認はなく、Piñuela がこの注釈を作ったものと推測する。この場合引用された稿本はおそらく Morales か Diaz の入門書、或いは Gonzalez の論文に挙げられた Varo 自身のラテン語稿本であろう。しかしながら、それぞれの章がほぼ同一である点を考慮に入れれば、これらが Varo 自身の言葉である事を全く除外する事はできない。この場合、彼はおそらく彼自身のラテン語稿本について言及しているはずである。実際、オリジナルのスペイン語稿本と1703年版を直接比較する事だけが、最終的にこの問題を解決できる。全ての可能性において、Piñuela の貢献は稿本の再構成と改作、章立てと幾つかの節の並べ替えに限られる。一つ推測できる事は章の序文は彼自身の独立した付け加えであり、Varo のものではない。更に、彼はある程度稿本を増補したと想像される。本文には、いくつかのフランシスコ会についての言及がある。このつながりは、Piñuela がフランシスコ会に属していたため、Varo のものというよりはむしろ Piñuela のものである。

以下に、Varo の言語学的解釈について注目したい。それは初期宣教師達が中国語に抱いていたものを理解するのに欠かせない情報を提供する。彼ら下位カテゴリーの範囲と順序がかなり異なる場合の、話題の順序について検討していたようである。特定の言語実体につけられた見出し語、すなわち機能語や particles と定義される文法不変化詞は、しばしば変更された。この事は初期宣教師達がどうやって中国語を理解したかに対する洞察を提供する。すなわち彼らは中国語は伝統的中国語学の「空虚な文字」(虚辞)とは明らかに一致しない不変化詞の選択によって構成されるべきだと信じていた。先駆者達が未知の言語を記述すると

き乗り越えなければならなかった障害を明らかにするものは、まさにこれら細部にある。概念上、それはある程度修道士の言語哲学や言語世界観を有効に伝えるものであるが、一方彼らの言語認識はラテン語の構造原理に束縛されており、それはしょっちゅう何の批判的考慮もなしに、中国語にあてはめられていた。彼らの選択の理由には論争の余地がある。私の意見では、初期宣教師達によって理解されていた中国語文法という特殊なケースでは、おそらく Edward Said によって定義されるような全くのヨーロッパ中心主義ではなかった。Said は東洋、主にアラビア地方における伝統的ヨーロッパ人の調査は、政治的力関係と拡張論が動機となっていたという、説得力のある論証を行った。この推進力は東アジアにおける西洋宗教の普及にも同様に見られるが、異なる宗派の言語学的成果はまた別の構成要素も生んだ。宣教師らを中国語に関する結論へと導いたのは単なる誤解ではなく、1つの達成できる構造原理として中国語に適用できると信じた、ある一定の原理による調査言語の構造への実用的な研究方法であったと考えられる。従って、Varo の不変化詞は、論争の余地があるにせよ、彼の文法の枠組みの中で重要な役割を果たした。それらは言語の中の特定の機能と推測され、ゆえに「機能語」と定義できた。この方法を中国語に適用することがどれだけ問題であるかは、例えば Premare1831で不変化詞の数と定義が本文中で変わっているように、文法用語としての中国語の不変化詞とは何かをいかに定義し、意味を限定するかの困難さに表されている。更に宣教師の入門書とは一般的に単なる単語の表をちりばめたものが普通であった (Varo1684)。

宣教師の語学者は言語調査において新しい対象を定義するのが困難であるときにはいつも、哲学的思索をもって詳述することなしに、単にそれを書き留めていたようだ。同じように、例えば Varo は用語対照表を用いたが (Varo1684)、それはそれ以上定義されることはなく、また彼の1684年の稿本である、中国語口語のためのスペイン語混じりのポルトガル語用語集にも故意に収められた (Varo1684)。宣教師文法である役割を果たした別の要素に古典からの引用がある。Cooper1974が記すように、Joao Rodriguez は彼の日本語文法にこの方法を徹底的に使った。古典からの引用は Nebrija のラテン語文法に見られる。Alvarez ですらこの方法を取り入れ、彼のラテン語文法には繰り返しキケロの文が引かれ、日本語を母語とする人にラテン語を教える際に使われた (Alvarez1594)。同じように、Rodriguez は彼の *Arte grande* に日本語の古典文献を大量に引用し、Varo も読者に偉大なる中国語の「小説」の重要性に注目するよう呼びかけた。Varo は正しいラテン語を学ぼうとする人は、まずキケロやウエルギリウスなどの有名なラテン語著述家の文章を学ぶべきだと主張している。そして中国語については、真剣な言語学習を求めるものは (現代の) キケロか小説 (自国語の小説) に専念するよう強く忠告する事を仮定した (Varo1703)。Cobrin が最近の小論「官話の短い歴史」で結論づけているように、正しい官話の使用法を学ぶために信頼できる情報を必要とするものは、偉大な官話小説を参照する事が予測されるという考えは、Varo だけでなくさらに Premare にも見られ、さらに下っては Y.R.Chao も、紅樓夢のような有名な中国語の小

説に直接言及している。更に、Ferguson1959の定義した「二言語変種分用」という観点から見れば、この官話という共通語は中国語の書き言葉が基礎となって発音、語彙それとシンタックスの基準を形成しており、明らかに現在の様々な口語や方言よりも高い信頼性があった。ゆえに、それは標準語として容易に認められ、当時の共通語として機能するのに適していたと考えられる。

Nebrija のような文法学者は、高い信望を得ていた古典の真価を受け入れ、その結果、言語を学ぶ教科書として確実で権威のある情報源と考えた。この考えは Varo や Rodriguez が文法論文中で古典に言及するときにも見られる。この書かれた情報に対する信頼の強調は Varo や Rodriguez のテキストだけに見られる共通した特性ではない。Varo の『アルテ』と Rodriguez が1604年から1608年の間に編纂した *Arte grande* とを比較したとき、両者の間には著しい類似が浮かび上がってくる。もう一度言わなければならないのは、Rodriguez と Varo の両者は情報源としてはっきりと Nebrija について述べている。ゆえに Varo と Rodriguez の間の類似が辿れるときはいつでも、Rodriguez と Varo に直接影響したものを辿る必要はなく、より初期の情報源である Nebrija のラテン語文法が反映されている点に注意しなければならない。しかしながら、幾つかの点で Varo の『アルテ』と Rodriguez の2冊目の日本語文法書である、1620年に出版された *Arte breve* と呼ばれるものを比較するのはもっともな事である。*Arte breve* は日本語の学習を始めたヨーロッパ人向けのもので、日本語のより進んだ学習者は彼の初期の *Arte grande* を参照した。後者は前者よりも簡明になっている。両方の著者が強調するのは正しい発音の重要性であり、このため、どちらの文法も音韻の章から始まっている。彼らの論証は驚くべき程度で一致している。Varo は中国語を正しく発音する方法は母語の話者を「自然で、影響のない方法」で模倣する事によって獲得されなければならないと推定した。音韻の章を優先させる事により、彼らは Nebrija に使用される順序に反している。一方で、Varo と Rodriguez の文法書では文語体の果たす顕著な役割に関して、幾つか明らかな不一致を見つけることができる。Rodriguez の *Arte breve* には日本語の文語についての章が含まれるが、Varo は文語体については一切触れていない。この点で、Rodriguez は正しい言語の慣用法を例示するときは必ず古典を取り入れていた Nebrija に従っている。

#### 10 Varo の『アルテ』がその後の文法研究に与えた影響

Varo のテキストは、最初の利用可能な中国語の文法に関する情報として、宣教師やヨーロッパの学者に広く歓迎された。彼のテキストの影響は以前の研究にある程度示されたわけだが(Breitenbach1996)、ここでは2, 3の側面について概略を示すに留める。ヨーロッパでは彼の作品は Etienne Fourmont(1683-1745), Abel-Remusat のような東洋学者や、歴史学者の Karl-Friedrich Neumann (1793-1870)などによって知られていた。Fourmont は Varo の『アルテ』をコピーしてラテン語に翻訳し、中国語の漢字を加えた。彼の版本は、*Linguae Sinarum Mandarinicae Hieroglyphicae Grammatica Duplex* として1742年に彼の名前で出版され、18世紀から19世紀にかけて有名な剽窃行為のケースとなった。中国語のより良い理解を得るために

「ラテン語の視点」を取り入れるという Varo の方法は、1831年にマラッカで印刷された Premare(1666-1736)の *Notitia linguae Sinicae* にも見える。

## 11 結びの言葉

Francisco Varo は彼の『アルテ』を編纂するのに、彼の自由に様々な資料に含まれる要旨と教えを利用したが、また後の中国語研究にも重要な影響を与えた。中国語を表すのにラテン語をモデルとして選択した事は、当時流布していた世論の結果であり、宣教師がラテン語の文法とその実用的な研究方法に精通していた事が、より容易にその選択へと導いた。中国語とラテン語の比較により、ヨーロッパの言語と比較した場合の中国語に特有な構造原理が知られる事となったが、中国語に固有の構造を真に理解するのに不幸な制限ともなった。結論として、Varo によって解釈されたギリシャ・ラテン概念は東洋に於ける文法観の展開にとって長くその影響を残し、ある程度それは現在でもなお感じられると主張できる。

西山美智江・内田慶市訳